

▶ 第5章

米国の中国脅威論と人的・文化的分断 ——「赤の恐怖」か「黄禍論」か

日本経済新聞社 上級論説委員

小竹 洋之

【ポイント】

- ▶ ドナルド・トランプ前米政権と新型コロナウイルス危機の下で、米国の対中感情は著しく悪化した。行き着いたのは共産党性悪説であり、中国とのデカップリング（切り離し）論だ。
- ▶ 共産党の1党独裁体制と権威的な国家資本主義を貫く中国を看過することはできない。しかし中国の台頭におびえるあまり、米国がある種のヒステリーに陥っている印象は拭えない。
- ▶ かつての「赤の恐怖」や「黄禍論」が再発し、「チャイナ・パージ（中国狩り）」が行き過ぎてはいないか。人的・文化的な切り離しは、多様な人材を引きつける米国の磁力を低下させる。
- ▶ ジョー・バイデン米政権は中国との「競争」を基本に据えつつ、コロナ対策や温暖化対策では「協調」の可能性も探る。「協調的な競争」や「制御された新冷戦」のあり方が問われる。



注目データ

かつてのヒステリーが米国を覆いつつある

